

# ソーシャルワークにおけるストレングスの特性

## —類似概念との比較をつうじて—

山口 真里

### I. はじめに

近年のソーシャルワークでは、利用者が主体的に生活を回復していくことを目標とし、それにむけた支援を行うことが重視されている。なかでもストレングス (strengths) は、利用者のもつ力や強さを表す概念として注目されてきた。筆者も、これまでの継続研究のなかで、利用者が自らのストレングスを活かし強めることで生活を立て直していく過程の意義を明らかにしてきた<sup>1)</sup>。

しかし先行研究でみる限り、ソーシャルワークにおけるストレングスはまだ理念として強調されているのにすぎず、ストレングスに着目した支援方法も模索されている途上にある。しかしストレングスは、研究者のなかでもストレングスと他の類似概念が混同して使用されている状況もみられる。そこで本研究では、ソーシャルワークにおけるストレングスと他の類似概念の整理から始めることによって、まずはストレングスの特性を明確にしていきたい。そのうえで、特にここではパワー (power) を取り上げ、ストレングスとの比較を試み。なぜならストレングスとパワーは、どちらもエンパワメント・アプローチで重視され、利用者の強さや力を表す概念でありながら、その特性の違いについての研究は少ない。そのため2つの概念については、これまで十分な整理がされてこなかった。そこで先行研究からストレングスの登場背景を明らかにしたうえで、その定義や内容を抽出して整理し、ストレングスの特性だけでなくパワーとの関係性についても明らかにしてみたい。そして利用者の主体的な生活回復への支援過程構築にむけた支援方法の手がかりを模索していきたい。

### II. ストレングス登場の背景

#### 1. 病理モデルから生活モデルへの移行

ソーシャルワークにおける利用者への視点は、その歴史的背景とともに変遷してきた。そこでまずは、ソーシャルワークの大きな流れである病理モデルから生活モデルへの変遷をとおして利用者の位置づけを考察してみたい。またここでは、今日ソーシャルワークで強調されるようになった利用者の力や強さとしてのストレングスの登場背景も明らかにしたい。

ソーシャルワークの歴史において、リッチモンド (Richmond, M. E.) の『社会診断』(1917

年) や『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』(1922年)は、ケースワークを科学的に体系化することに寄与した。彼女は、ソーシャル・ケース・ワークの焦点がその人のパーソナリティと環境にあり、その全体の中で利用者を理解しようとしたのである<sup>2</sup>。しかし1920年代は、第1次世界大戦(1914年～1918年)から帰還した兵士や家族の心理的ケアがケースワークに求められ、フロイト(Freud, S.)の精神分析理論を基礎とした心理療法的なアプローチの発達がめざましくなった。このアプローチは、個人のパーソナリティの病理的側面から利用者を理解しようとしたため、後に診断主義的アプローチと呼ばれるようになった。これが病理(医学)モデルの代表として理解されるようになったのである。

しかし個人の内面に焦点化した病理モデルの支援は、1960年代の社会問題の多様化に伴い、効果への疑問やその限界が指摘されるようになってきた。病理モデルの問題点については、秋山薊二が7点に整理している<sup>3</sup>。秋山の指摘をふまえて病理モデルの問題を整理すれば、①クライアント<sup>4</sup>がソーシャルワーカーによる治療を必要とする存在として捉えられていたこと、②ソーシャルワーカー主導で支援が行われていたこと、の2点から効果的支援が提供できなかったことと理解できる。

しかし病理モデルからの支援が、クライアントの能力をまったく無視したものばかりとはいえなかった。例えばパールマン(Perlman, H. H.)は、1957年に出版した著書のなかでワーカビリティ(workability)という新造語を用いてクライアントの能力を定義づけていた。ワーカビリティそのものは、「人々や問題解決に取り組む手段にかかわることを可能にする(大なり小なりの努力と効果を伴う)動機づけや能力の組み合わせ」と理解されており、『働くことのできる能力』と『治療的影響への反応』の両方を意味<sup>5</sup>するものであった。しかしワーカビリティは、ソーシャルワーカーによって評価・判断されるクライアントの能力を示したものであり、利用者自体の認識する能力と理解されていなかったのである。すなわち病理モデルからクライアントの能力に着目することは、ソーシャルワーカーと対等な関係を構築する利用者の主体的な強さや能力を引き出すことと、全く違う視点からのアプローチであったといえるだろう。そのため結果的には、ソーシャルワーカー主導の支援が続いていくことになったのである。

その後1970年代には、病理モデルの限界と批判から生活モデルが登場してきた。生活モデルでは、生態学理論やシステム理論を導入することによって、人と環境の相互作用状況を包括的視座から捉えようとしたのである。すなわち生活モデルは、問題が個人の内面に起こるのではなく人と環境の交互作用のなかに生じ、そこに焦点化して支援を展開していこうという考え方であった。

## 2. 生活モデルにおける利用者理解

1980年代になると生活モデルは、ジャーメインとギッターマン(Germain, C. B. & Gitterman, A.)らが指摘するように、①人々の強さや生来の健康推進、継続した成長、潜在能力の解放、②最大限満足のいく状態にするための環境の改良、③人-環境の適合のレベルの向

上<sup>6</sup>、を志向するようになった。特に彼らは、利用者の強さを表す生活モデルの鍵となる概念として力量＝コンピテンス（competence）という概念<sup>7</sup>に着目した。1970年代の生活モデルの登場から1980年代のコンピテンスに着目していく動向には、利用者の能力や主体性を活かしてソーシャルワークを展開しようとする始まりをみることができる。

また生活モデルの意義は、①人と環境を不可分な一つのシステムとして理解したこと、②人と環境の相互作用の視点から利用者の環境へ適応する力までを視野に入れたこと、にある。それは、すでに述べてきたように、病理モデルが人と環境を二分してきたことで支援効果を得られなかったことと大きく関係している。しかしその後1983年にメイヤー（Meyer, C. H.）は、生活モデルにおける生態学的視座とシステム理論の双方の流れを統合し、より実践に有効な視座としてエコシステム（ecosystem）という発想を紹介した<sup>8</sup>。このことによってソーシャルワークでは、エコシステムの枠組みから固有な利用者の生活を実体に即した形で説明できることが強調されるようになったのである。特に太田は、エコシステムが「生活という状況や現実をシステムとして理解し、生活の広がりや仕組み、関係や内容から体系的に考えることと、さらに生活を環境との相互関係、流れや変化を生態的に理解しようとする発想」<sup>9</sup>であると定義し、この発想の相互に関連する3つの特徴を指摘した。

- ①マイクロからマクロまでを包括する生活理解と視野の拡大
- ②方法としてのソーシャルワーク過程展開の重要性
- ③変容・成長を可能にする利用者の能力の重視

①マイクロからマクロまでを包括する生活理解と視野の拡大を行うエコシステム視座からみると、ソーシャルワークとは利用者本人や周りの環境だけでなく社会政策や国家までも見据えた支援ということになる。そこでは、生活システムを構成する要素が相互作用を行い、またそれぞれのシステムがフィードバック機能をつうじて循環している。すなわち利用者が生活していくには、周りの環境と相互作用していく力をもたなければならないのである。そのことは、エコシステム視座が支援者の生活への視野を広げた点で大きな意義がある。またそれに伴ってソーシャルワークは、利用者自身による問題解決と変容を広い視野からどのように効果的に達成していくのかという点に焦点化することになった。次に②ソーシャルワーク過程展開の重要性とは、生活自体を「その人自身と環境とを含んだ生態的で多様なシステムからなる」<sup>10</sup>エコシステム過程と理解し、過程を展開することによって利用者の生活の変容を重視することを示している。さらに③利用者の能力の重視とは、過程展開により利用者の生活を変化させるうえで、利用者の成長・変容がソーシャルワーク実践の目標になることを意味する。同時にそこでは、利用者が成長・変容する能力や強さをもつ存在であり、支援の主体となりうる存在であることも示している。このようにエコシステム視座からの生活モデルは、利用者中心の展開こそが生活支援方法に結びつくことを強調している点が特徴であろう。

### 3. 利用者のストレングスの重視

1970年代後半からは、エコシステム視座を背景に、利用者の能力や強さに着目したエンパワメント (empowerment) やストレングス研究が盛んになってきた。リー (Lee, J. A. B.) によるとソロモン (Solomon, B. B.) は、公民権運動を契機にしたエンパワメント実践を「利用者が利用者自身でもしくは相互に、社会的・経済的・政治的な環境におけるパワーを獲得するのを支援することであり、そのために利用者と協同すること」<sup>11</sup>であると1976年の著書で定義した。このことは、利用者主体の支援展開と利用者とソーシャルワーカーの協働を強調するエンパワメントの支援枠組みを明確にしたといえよう。

一方でソーシャルワークにおけるストレングス視点の導入は、1982年のカンザス大学社会福祉大学院による重度の精神障害者の強さや健康的な部分に焦点化したケースマネジメント<sup>12</sup>の試みから始まったと考えられる。ここでのストレングスは、利用者が自身の生活世界のなかで築いてきた経験や価値、力や強さを重視し、利用者との対等な協働関係のなかでソーシャルワーク支援を行うという概念であった。同時にエンパワメント研究では、それらの行動の基盤となる概念がストレングスと称された。例えば小松源助は、エンパワメント・アプローチが健康や強さの側面を重視するストレングス視点に基づく試みと連携し、補強し合いながら発達してきたこと<sup>13</sup>を指摘している。またカウガーら (Cowger, C. D. & Snively, C. A.) は、利用者の力や強さと表現されるストレングスを「エンパワーメントのための燃料やエネルギー」<sup>14</sup>として重視した。小松によるとマイリーら (Miley, K. K. & O'Melia, M. & Dubois, B.) も、「強さ志向の視点」(ストレングス視点) を「エンパワーメント・アプローチを用いるソーシャルワーカーにとって重要な準拠枠」<sup>15</sup>であると位置づけている。このようにストレングス視点は、利用者が主体的に力を獲得・増強する過程を促進するエンパワメント・アプローチの基盤として重視されるようになったのである。

一方ストレングス視点は、エコシステム概念も含めて従来の実証主義的な科学観に批判的な社会構成主義 (social constructionism) <sup>16</sup>を志向するソーシャルワークの研究者のなかで援用されるようになった。社会構成主義とは、人間の世界観が他者との関係性のなかで形成されると理解し、他者との関係性への主観的な認識を重要視している考え方である。そのため社会構成主義からのストレングス視点は、利用者の主観的な生活世界を理解する方法と利用者自身が語る力とを結びつけようとするところにその特徴がある。このことは、狭間香代子の「ストレングス視点は (ワーカーの) 専門的知識と同等にクライアントの日常知を重視している」<sup>17</sup>という指摘からも理解できる。つまり利用者は、自分の生活世界を知る専門家であるゆえ、ソーシャルワーカーとの対等な関係を目指すために自身のことを語るストレングス視点が必要になるのである。

またマイリーらは、ストレングスを「生来もっている能力や獲得した才能、発達させてきたスキルなど、私たちが得意であると思うもの」と定義し、そこに「特性や能力、行動などの目に見えて明らかなものだけでなく、些細な成功や目に見えない素質」も含まれるとその内容を

示している<sup>18</sup>。サリービーも、ストレングスが「能力や資源、強みのようなもの」であり、具体的には「人々が逆境のなかで学んできたこと、教育や生活経験のなかで獲得してきた知識や知恵、人々のもつ特質や特性、徳、才能、プライド、スピリチュアリティ、コミュニティのもつ福祉力、文化的・個人的なストーリーと伝承」<sup>19</sup>などがあると指摘している。このようにストレングスは、利用者の固有な生活世界で蓄積される力や強さ、豊かさを示すのである。すなわちストレングスは、利用者がこれまで培ってきた様々な経験や能力、資源を表し、環境に働きかける行動力の源となる概念と理解できる。

### III. ストレングスの類似概念

#### 1. 特定領域における類似概念

ソーシャルワークの歴史をみる限り、利用者に焦点づけた研究や利用者のストレングス研究は生活モデルに移行してから始まっている。しかしストレングス研究自体は、いまだ視点として強調されているにすぎない。特に具体的な支援方法や展開過程での手続き、ソーシャルワーカーの固有な役割については、課題が山積しているといえよう。またこれまでも利用者中心や利用者主体に関する概念が登場し、それなりに近年のソーシャルワークに影響を与えてきたが、なかでもストレングス概念は十分な整理がされずに現在に至っている。なぜなら比較的ストレングスに近い用語が特定の領域や分野で使用されてきたこともその理由の1つといえるからである。

このような類似概念には、「レジリエンス (resilience)」や「生活力」、小島蓉子らが障害者の社会生活支援に用いようとした「社会生活力 (Social Functioning Abilities: SFA)」、「可能性」、エンパワメントで用いられる「パワー」、「社会的自律性」などがある。そこでまずは、ソーシャルワークのなかで提唱されてきている先駆的なストレングスの類似概念を整理することから始めてみたい。特にこの作業は、ソーシャルワークにおけるストレングスの位置づけを明確にすることにつながると考えている。

まずはレジリエンスである。レジリエンスは、「はね返す力」や「回復力」とも訳され、近年20年間にわたって児童や家族を対象としたソーシャルワークや発達精神病理学の分野で発展してきた概念である<sup>20</sup>。ウォルシュ (Walsh, F.) は、この概念を「過酷な人生の困難に耐えたり、そこから立ち直ったりする能力」<sup>21</sup>と定義している。レジリエンスは、人生の危機や困難を発達上の危険因子であるとみなしてきた従来の発想からの転換を行った点で大きな意味がある。またレジリエンスは、これまで乗り越えてきた困難への対応を精神的な強さや力として認識し支援に活かしていこうとするものである。このような発想の転換は、ストレングス概念が登場してきた経緯と共通する。またレジリエンスが主に人生の危機や困難の経験とあわせて論じられている点では、ストレングスの1つの要素とみなすことができよう。

次に生活力とは、白沢久一が「①経済力 (消費と生産)、②教育力 (能力と人格) との統一であり、それは経済的土台と生活意識 (態度) との関係でもある」<sup>22</sup>と論じている概念である。

特に彼は、要保護者<sup>23</sup>が要保護層を脱する要因分析の指標として生活力を用いた。そして利用者や家族の収入や自己努力などの項目をソーシャルワーカーが客観的評価を行うことによって意味づけられる力であると述べている。この考え方は、ソーシャルワーカーの客観的評価が伴う点とソーシャルワーカーが強化の主体となる点を含んでおり、どちらかというところパールマンが提唱したワーカビリティに近いと考えることができる。その点ストレングスとは、誰でも力や強さ、豊かさをもち、それが反映される主観的な生活世界を認識しようとする概念であるゆえ、客観的評価の対象となる生活力とは異なるものである。

また社会生活力は、「障害のある人が自分の障害を理解し、自分に自信をもち、必要なサービスを活用して、自らの人生を主体的に生き、積極的に社会参加していく力」<sup>24</sup>と定義されている。ここでは、自立を目指したリハビリテーションのプログラムによって社会生活力を強化していくことが重視される<sup>25</sup>。社会生活力の強化とは、障害者が社会生活を営むうえで環境に積極的に働きかけていくことである。これは、利用者がこれまで培い、蓄積してきた多様な力や強さであるストレングスに対して、障害者の自立を目指して環境に働きかけていく行動力と理解できる。社会生活力は、具体的な対象への行動が伴うことまで含むという点で、ストレングスと異なる概念といえよう。

このようにストレングスの類似概念は、多様な分野で登場してきている。それらを比較してみると、支援対象となる人々の強さや可能性に焦点を当てる視点は共通している。しかしストレングスは、ソーシャルワークの対象となる利用者の固有な生活経験を重視し、そのなかで培われた利用者の力や強さをありのままに尊重する点が特徴である。そこで他の先駆的な概念と異なるストレングスに着目し、その内容を詳細に考察することは、利用者を固有な存在として捉えながら支援展開を行うソーシャルワークに有効な示唆を与えられよう。

## 2. パワーと社会的自律性との比較

次にソーシャルワークのなかでも、ストレングスと同じ生活モデルの流れで登場してきたパワーと社会的自律性について同様な比較を試みていくことにしたい。

パワーは、エンパワメントのなかで増強し、発揮していく力である。文献を読むなかでは、グティエレ (Gutiérrez, L. M.) が「欲しいものを得る能力、他人の考えや感覚、信念に影響を与える能力、家族や組織、コミュニティのような社会システムにおける資源の分配への影響力」<sup>26</sup>と定義している。同様な考えでは、丹野真紀子が「人や社会に対して影響を与える能力」<sup>27</sup>と捉えている。また狭間は、トフラー (Toffler, A.) やボールディング (Boulding, K. E.) のパワーの定義を整理したうえで、その特徴を①パワーは常に対象とするものとの関係で捉えられること、②パワーは保有する資源の種類、保有の程度と関係すること、の2点にまとめている<sup>28</sup>。すなわち先駆的な研究者たちによると、パワーは環境に働きかけていく力や行動力と理解できる。またパワーは、その力を保持・発揮する対象を限定していないことから、社会生活力を包括する概念であり、ストレングスとは違うと考えられる。ストレングス自体は、利用者が

生活体験から蓄積してきた強さや力の状態を示す概念であり、それだけで行動に結びつく概念ではない。一方でパワーは問題解決の対象にむけて発揮される力であり、行動を伴った概念と捉えられる。

次に社会的自律性とは、コンピテンスとも呼ばれ、すでに本論文の生活モデルの流れのなかでも解説を行ってきた。マルシオ (Maluccio, A. N.) も、コンピテンスを「環境との効果的な相互作用を可能にする人びとの技術や知識、特質などの総体」<sup>29</sup>と定義した。彼は、コンピテンスの促進がソーシャルワークの介入において重要な機能であると考え、competence-oriented social work を提唱したのである。competence-oriented social work の特徴<sup>30</sup>は、ソーシャルワーカーが利用者のコンピテンスを問題解決に結びつける役割を果たすと明示したことである。ここで初めて利用者の能力を用いて問題解決することやそのためのソーシャルワーカーの役割が重視されるようになった。またわが国でも太田義弘は、コンピテンスを社会的自律性と呼び、「人と環境との相互関係のなかで、目標に向かってつねに自らを最善に機能させようとする自己統御力」<sup>31</sup>と定義し、エコシステム視座の重要な概念として位置づけている。また今日のソーシャルワーク実践においては、利用者が環境に適応し、問題解決を行う能力としての社会的自律性の促進が中心的課題となってきた。このように社会的自律性は、歴史的にみても利用者の力を重視する先駆的な概念と捉えることができる。それに加えて、人々のもつ技術や知識、問題解決能力など、ストレングスやパワーの定義を含む内容もみられる。

### 3. 社会的自律性を構成するストレングスとパワー

またコンピテンスについては、和気純子がマルシオによる4つの類型を以下のように解説している<sup>32</sup>。

- ①達成／成果としてのコンピテンス
- ②内的要因としてのコンピテンス
- ③行動－環境の相互作用としてのコンピテンス
- ④生態学的コンピテンス

和気によると①達成／成果としてのコンピテンスは、行動そのものよりも個人の努力による人生での課題達成の成果や結果を重視している。②内的要因としてのコンピテンスは、発達の過程の学習で内面化される利用者が効果的な行動を起こす要因となる内面的な力を示している。③行動－環境の相互作用としてのコンピテンスは、利用者自身や社会が期待する役割を効果的に遂行していく能力を示している。そして④生態学的コンピテンスは、マルシオがもっとも強調してきたコンピテンスであり、利用者自身が「環境を自ら活用し、変容し、適応を図る能力」<sup>33</sup>と位置づけている。

このようにコンピテンスは、個人のもつ有能さや行動を裏づける力と、環境と相互作用を行っていく力とに分類することができる。その観点から太田は、①達成／成果としてのコンピテンスと②内的要因としてのコンピテンスを利用者の「内的適応力」に整理し、また③行動－環

境の相互作用としてのコンピテンスと④生態学的コンピテンスを「システム構成力」にまとめ、それらを包摂した概念として社会的自律性を位置づけている<sup>34</sup>。すなわち社会的自律性とは、「環境を含んだ固有な課題解決や自己実現の能力」<sup>35</sup>であり、利用者自身が生活過程のなかで習得してきた能力とそれに基づく行動力を示している。これは、小島蓉子の「周囲の環境を変えたいと思う動機であり、そしてこれを実現せしめるための実行力が、すなわち<sup>コンピテンス</sup>力量である」<sup>36</sup>という主張に裏付けられている。このことから社会的自律性は、生活体験のなかで蓄積してきた強さや力であるストレングスと、ストレングスを基盤に環境への行動力として発揮されるパワーを包含していると理解できる。

しかしながら社会的自律性は、異なる特性をもつストレングスとパワーから構成されているものの、そのことに着目している研究は皆無といえよう。そのため社会的自律性は、自助概念として認識されているが、実践概念としての位置づけは十分でない。なぜならストレングスやパワーがどのような特性をもって実践で活用していくことができるかが明確にされていないからである。そこで次に、先行研究をもとにストレングスとパワーの特性や関係性を明らかにしてみたい。

#### IV. パワーとの比較にみるストレングスの特性

##### 1. ストレングスとパワーの関係性への示唆

ストレングスとパワーは、社会的自律性を構成する要素というだけでなく、エンパワメントを行うために必要な概念としても重視されている。このようにストレングスとパワーは、同じアプローチのなかでも利用者の力や強さを表す概念として用いられている点で密接に関連している。一方で、先にふれたように、社会構成主義の観点からエンパワメントを捉えようとする試みもある。そこでもストレングスとパワーは、重要な概念として位置づけられている。

しかしこれらの先行研究では、ストレングスとパワーの両概念の関連性を明示したものはあまりみられない。そこで2つの用語に近い概念を比較考察している久木田純やリー (Lee, J. A. B.) の考えを参考に考察を試みることにした。まず久木田は、パワーが「身体的な力、物理的な力や富、知識や情報、技能、物的資源、組織、土地、時間、信用、尊敬、愛情など」のリソースから生み出されると位置づけている。またこのリソースを「潜在的にパワーに変換できるものであるが、実際には効果的に用いられなければパワーとして機能しない」と定義しており、これをパワーに変換するためには支援者の効果的な介入が必要であると示唆している<sup>37</sup>。ストレングスとパワーの関係という視点からみると彼の提唱するリソースは、いわゆる心的・身体的・社会的な能力や資源、強さなどを示しているという点でストレングスとほぼ同義とみなすことができる。そしてこの考えでは、リソースとパワーの間に変容する過程が存在するのである。一方リーによると、「潜在的能力は私たちすべてのなかで展開されるパワーの基盤である」<sup>38</sup>と潜在的能力を定義している。これらは、いわゆるストレングスとパワーの関係への示唆を



与えてくれるものであった。またリーは、ストレングスとパワーがそれぞれの特性をもちつつ、そこには相互関係があることを指摘している。

しかしストレングスとパワーについて同義語として用いている研究者もあり、いまだ混同している現状があるのは否めない。しかし先行研究をふまえると、ストレングスとパワーは全く同義語とはいえない。むしろ両者は、一連の過程のなかで相互関係をつうじて変数のように変わっていく要素として理解する方が適切である。

## 2. 先行研究にみるストレングスとパワーの特性

そこで次にストレングスとパワーの特性を整理し、両者の関係性を明らかにしたい。まずこれまでの先行研究からストレングスとパワーの定義を抽出し、それぞれの内容を表す言葉を示したのが表 1<sup>39</sup>である。

表 1 スtrenグスとパワーの内容

ストレングス			パワー
・願望	・自己意識	・感情（愛情など）	・必要とするものを得る能力
・意志	・知識	・絆	・他者（人や社会）へ影響を与える力
・信念	・才能	・つきあい	・資源にアクセスする能力
・嗜好	・技術	・役割	・物事を思い通りにする（コントロールする） ことのできる能力
・趣味	・自信	・場	・知識
・目的	・経験		・技能
・特質	・プライド		・資源の分配への影響力
・特性	・習慣		・権力
・特徴	・物的資源		・知力（知識力、情報力、判断力）
・心的能力	・サービス		・筋力（物理的な力、暴力、武力）
・情緒的能力	・サービスを提 供する人々		・金力（経済力）
・身体的能力			・資源
・社会的能力	・身近な人々		

表 1 をみるとストレングスは、利用者の生活経験のなかで蓄積された能力や強さや豊かさであり、本人の特性や価値などが重視される抽象的な概念である。他方パワーは、明確な対象に対して具体的に発揮していく力であり、影響を与える力であると理解できるだろう。

このストレングスとパワーの違いは、交通事故により身体障害をもつことで職を失い、車椅子で生活するようになった青年 A（以下、A とする）が自立生活するという例で示すとよりわかりやすい。例えば身体障害者である A は、身体の変化だけでなく、職を失うなどの生活の変化によって無気力状態に陥っていったとしよう。しかしその後 A は、ソーシャルワーカーの支

援によって就職して一人暮らしをすることに徐々に意欲をみせ始め、在宅支援やボランティアの協力、本人の就職をとおして一人暮らしを実現していく。このAの事例でみるとストレングスは、「一人暮らしをしたい」という願望やこれまでの生活で得た経験などである。また就職や一人暮らしをする準備のためのストレングスは、これまでの職場で養った技術や友人・家族という資源、職場や友人たちとの間で培った対人コミュニケーション能力（社会的能力）、社会生活上の知識である。

次にAの事例でみるパワーとは、友人と一緒にA自身が対人コミュニケーション能力を発揮して、一人暮らしの支援ボランティアを募集したり、これまでに得た職業の技術を活かせるような職場を探したりする行動力などが考えられる。すなわちAの事例からみるとパワーは、ソーシャルワーカーとの支援過程をつうじて本人のストレングスが具体的な目標や対象に焦点化した行動力として変容していった結果であり、発揮された力や今後の生活に活かされる能力であると理解できるのである。

### 3. ストレングスからパワーへの過程研究の必要性

このようにストレングスとパワーは、異なる特性をもつことがわかる。そして利用者が問題解決に向けてパワーを発揮していくためには、利用者の生活世界を重視したストレングスを基盤にしなければ、利用者の主体性を伴う力とはなりえない。この利用者がこれまで培ってきた力を問題解決の力に活かし発揮するという点からみれば、利用者の問題解決にむけた支援過程はストレングスがパワーへと変容していく展開であると理解できるのである。それゆえストレングスやパワーの考察は、ソーシャルワーク過程研究と同様にそこで行われる変容過程研究が重要となる。そしてそれは、ソーシャルワーク実践の中心的課題である社会的自律性を促進する過程を研究することにつながるのである。

今日ソーシャルワークの過程は、太田によると「クライアントとソーシャル・ワーカーとが協働し、生活援助を通じた課題解決や、それによる変容・成長を目標に、時間的経過のなかで局面を展開して提供する一連の援助行為の積み上げからなる実践活動であり、その成果はフィードバックされ、さらにクライアント援助に焦点化される科学的かつ専門的な援助システムの流れである」<sup>40</sup>と理解されている。このように一般的ソーシャルワーク過程には、変容を起こしていくアセスメントやプランニングなど特徴的な局面があり、そこには具体的手段や手順もみられる。しかしストレングスやパワーの研究では、この点が明確に指摘されているものはほとんどないといえよう。そのなかにあって久保美紀は、ストレングス視点に基づくエンパワメント過程を「クライアントとワーカーが互いに影響を与える相互努力の過程」<sup>41</sup>と定義し、利用者とソーシャルワーカーがパートナーシップを築き、相互作用を行うために必要であると主張した。このようにストレングス研究でも、ストレングスを活用した支援過程の展開が重視されている。しかしエンパワメントでは、これまで主に個人的・対人関係・社会・政治的レベルのミクロからマクロの段階ごとで展開が論じられてきているが、それぞれのレベルでの局面展開を

つうじてストレングスを具体化する支援展開方法は明らかにされていない。一方社会構成主義を志向するソーシャルワークでストレングスは、「意味の生成力」<sup>42</sup>と位置づけられ、利用者の語りの必要性和そのもつ意味を重視している。しかしそこには、問題解決につなげていく具体的展開や方法が明確でない。このようにストレングスからパワーへの変容に焦点化した過程研究は、まだ新しい領域であり、実践を視野に入れた具体的な展開方法を明らかにしていくことが今日的課題となる。

## V. おわりに

本稿では、ソーシャルワークで利用者の力や強さに着目するようになった歴史的経緯をふまえて、ストレングスと他の類似概念を比較し整理してきた。そこでは、ストレングスが客観的な評価の対象ではなく、利用者の生活世界を強く反映する特性をもつことを明らかにした。それに加えて、利用者の社会的自律性の促進というソーシャルワークの目標は、ストレングスをパワーへ変容させていく過程展開をつうじて達成しようという提案を行うことができた。しかしこうした過程を実践方法として構築していくためには、その局面とそこでのソーシャルワーカーの働きかけを考察・検証していくことが必要となる。そこで今後は、先行研究や実践検証をつうじて、ストレングスをパワーへ変容させていく局面展開とそこでのソーシャルワーカーの役割を考察し、提示していきたい。

---

1 詳細については、以下の文献を参照していただきたい。

拙論「ストレングスに着目した支援過程研究の意味」『福祉社会研究』第4・5号合併号、京都府立大学福祉社会研究会、2005年

2 メアリー・E・リッチモンド著、小松源助訳『ソーシャル・ケースワークとは何か』中央法規出版、1991年、p.57

3 太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術総論—』光生館、1999年、pp.53-54

4 病理モデルでは、利用者のことを患者という意味でクライアントと呼んでいた。しかし今日のソーシャルワークでは、利用者のことを治療対象ではなく、支援の主体として捉え、サービスを利用する利用者と呼んでいる。そのため本論文では、利用者とクライアントを区別して用いている。

5 Perlman, H. H., *Social Casework: A Problem-solving Process*, The University of Chicago Press, 1957, p.183.

ヘレン・H・パールマン著、松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク 問題解決の過程』全国社会福祉協議会、1967年、p.225

6 Germain, C. B. & Gitterman, A. "Ecological perspective", *In Encyclopedia of Social Work 19<sup>th</sup> ed.*, NASW, 1995, p.821.

7 C・B・ジャーメイン著、小島蓉子編訳、『エコロジカル・ソーシャルワーク—カレル・ジャーメイン名論文集—』、学苑社、1992年、pp.192-197

- 8 中村佐織「アセスメント概念におけるエコシステムの視座の意味」『長野大学紀要』第19巻第2・3号合併号、長野大学産業社会学部、1997年、p.16
- 9 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング—利用者参加へのコンピュータ支援—』中央法規出版、2005年、p.7
- 10 同書、同頁
- 11 Lee, J. A. B., *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press, 1994, p.9.
- 12 先行研究のなかでは、年代や文献によってケースマネジメントとケアマネジメントという2つの用語が登場する。しかし本論文では、2つの用語を同義と捉えたいうえで、特定の年代の試み等以外では、近年の研究や実践でよく用いられているケアマネジメントの方を使用している。
- 13 小松源助「ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題」『ソーシャルワーク研究』Vol.21 No.2、相川書房、1995年、p.6
- 14 Saleebey, D. (ed.), *The Strengths Perspective in Social Work Practice the 3rd edition*, Allyn and Bacon, 2002, p.108.
- 15 小松源助、前掲書、p.6
- 16 social constructionism については、構成主義 (constructivism) と同義語とされたり、社会的構築主義と訳されていたりする。しかし本論文では、ソーシャルワークへの援用という観点から社会環境も視野に入れることを考え、源流が心理学である構成主義ではなく、社会構成主義という用語を用いた。さらに近年のソーシャルワーク研究論文において social constructionism = 社会構成主義という和訳が主流となっているため、これに従った。参考文献については、以下のとおりである。
- ・久保絃章・副田あけみ編著、『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店、2005年
  - ・ケネス・ガーゲン著、東村知子訳『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版、2004年
  - ・西條剛央『構造構成主義とは何か—一次世代人間科学の原理—』北大路書房、2005年
  - ・Saleebey, D. (ed.), *op. cit.*.
  - ・Miley, K. K. & O'Melia, M. & Dubois, B., *Generalist Social Work Practice: an empowering approach*, Allyn and Bacon, 2004.
- 17 狭間香代子『社会福祉の援助観 ストレングス視点／社会構成主義／エンパワメント』筒井書房、2001年、p.156
- 18 Miley, K. K. & O'Melia, M. & Dubois, B., *op. cit.*, p.215.
- 19 Saleebey, D. (ed.), *op. cit.*, pp.84-87.
- 20 以下の文献を参照した。
- ・石毛みどり「中学生におけるレジリエンスと無気力感の関連」『人間文化論叢』第6巻、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、2003年
  - ・Walsh, F., Family Resilience: A Framework for Clinical Practice, *Family Process*, Vol.43 No.1, 2003.
  - ・Gilligan, R., Enhancing the resilience of children and young people in public care by mentoring their talents and interests, *Child and Family Social Work*, 1999.
- 21 Walsh, F., *op. cit.*, p.1.
- 22 白沢久一「要保護層とその脱出への要因分析」『北星論集』第22号、北星学園大学文学部、1984年、p.32
- 23 要保護者は、生活保護法第6条で「現に保護を受けているとしないにもかかわらず、保護を必

要とする状態にある者」と定義されている。特にここでの要保護層とは、生活保護の受給対象者というよりは「事前の予防をふくめた生活安定の施策及び制度」\*である生活保障の対象となる要保護者の人々を指していると考えられる。

\*荒木誠之編『テキストブック 生活保障論』法律文化社、1996年、p.4

- 24 赤塚光子・石渡和実・大塚庸次・奥野英子・佐々木葉子『社会生活力プログラム・マニュアル—障害者の地域生活と社会参加を支援するために—』中央法規出版、1999年、p.3
- 25 小島蓉子・飯田雅子編著『介護福祉士選書3 三訂 障害者福祉論』建帛社、pp.123-124
- 26 Miley, K. K. & O'Melia, M. & Dubois, B., *op. cit.*, pp.88-89.
- 27 丹野真紀子「エンパワーメントの視点からみるソーシャルワーク援助に関する一考察」『社会福祉』第36号、日本女子大学社会福祉学科、1995年、p.44
- 28 狭間香代子「エンパワーメント・アプローチにおけるストレングス視点の意味」『社会福祉実践理論研究』Vol.9、日本社会福祉実践理論学会、2000年、p.68
- 29 Maluccio, A. N. (ed.), *Promoting Competence in Clients: A New/Old Approach to Social Work Practice*, The Free Press, 1981, p.ix.
- 30 *Ibid.*, p. x & pp.10-21.
- 31 太田義弘・佐藤豊道編『社会福祉入門講座2 ソーシャル・ワーク 過程とその展開』海声社、1984年、p.62
- 32 和気純子『高齢者を介護する家族—エンパワーメント・アプローチの展開にむけて—』川島書店、1998年、pp.151-152
- 33 同書、p.152
- 34 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房、1992年、p.57
- 35 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著、前掲書、p.6
- 36 C・B・ジャーメイン著、小島蓉子編訳、前掲書、p.227
- 37 久木田純・渡辺文夫編著『現代のエスプリ 376 エンパワーメント 人間尊重社会福祉の新しいパラダイム』至文堂、1998年、pp.27-28
- 38 Turner, J. F. (ed.), *Social Work Treatment: Interlocking Theoretical Approaches the 4<sup>th</sup> edition*, The Free Press, 1996, p.220.
- 39 表1の作成については、主に以下の文献を参照した。
- ・秋山智久・井岡勉・岡本民夫・黒木保博・同志社大学社会福祉学会編『社会福祉の思想・理論と今日的課題』筒井書房、2004年
  - ・久木田純・渡辺文夫編著、前掲書
  - ・久保紘章・副田あけみ編著、前掲書
  - ・Saleebey, D. (ed.), *op. cit.*
  - ・仲村優一・窪田暁子・岡本民夫・太田義弘編『講座 戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望IV 実践方法と援助技術』ドメス出版、2002年
  - ・狭間香代子、前掲書、2000年
  - ・Fast, B. & Chapin, R., *Strengths- Based Care Management for Older Adults*, Health Professions Press, 2000.
  - ・Weick, A., Rapp, C. A., Sullivan, W. P. & Kisthardt, W., A Strengths Perspective for Social Work Practice, *Social Work*, 34(4), 1989.
  - ・Miley, K. K. & O'Melia, M. & Dubois, B., *op. cit.*
  - ・Rapp, C. A., *The Strengths Model: Case Management with People Suffering from Severe and Persistent Mental Illness*, Oxford University Press, 1998.

40 太田義弘、前掲書、1992年、p.142

41 秋山智久・井岡勉・岡本民夫・黒木保博・同志社大学社会福祉学会編、前掲書、pp.225

42 狭間香代子、前掲書、2001年、p.162